２０２６／０１／２５　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　牧師

主　　題：溢れる罪にまさる主の憐れみ
聖書箇所：ヨハネの福音書　７章５３節－８章１１節

きょうからはまたヨハネに戻って、ヨハネ７：５３－８：１１の内容を皆さんと一緒に考えたいと思います。私たちが愛して、またいつかお会いする偉大なイエス様の姿に、一緒に目を留めてみたいと思います。では、今回の箇所をお読みします。

ヨハネ７：５３－８：１１

「7:53 〔そして人々はそれぞれ家に帰った。 8:1 イエスはオリーブ山に行かれた。:2 そして、朝早く、イエスはもう一度宮に入られた。民衆はみな、みもとに寄って来た。イエスはすわって、彼らに教え始められた。:3 すると、律法学者とパリサイ人が、姦淫の場で捕らえられたひとりの女を連れて来て、真ん中に置いてから、:4 イエスに言った。「先生。この女は姦淫の現場でつかまえられたのです。:5 モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われますか。」:6 彼らはイエスをためしてこう言ったのである。それは、イエスを告発する理由を得るためであった。しかし、イエスは身をかがめて、指で地面に書いておられた。:7 けれども、彼らが問い続けてやめなかったので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」:8 そしてイエスは、もう一度身をかがめて、地面に書かれた。:9 彼らはそれを聞くと、年長者たちから始めて、ひとりひとり出て行き、イエスがひとり残された。女はそのままそこにいた。:10 イエスは身を起こして、その女に言われた。「婦人よ。あの人たちは今どこにいますか。あなたを罪に定める者はなかったのですか。」:11 彼女は言った。「だれもいません。」そこで、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」〕」

おそらく多くの人がよく知る有名なストーリーがここに出てきました。皆さんの中にも、この場面で見られるイエス様のあわれみ深さに感動した、心打たれた、という人もたくさんいるでしょう。聖書、特に福音書は、イエス様がどれほど愛に富んだ恵み深いお方かを私たちに教えてくれますが、その中でも今回の箇所ほどそれが鮮明に書かれているものはないと言っても過言ではないかもしれません。それほど、人々の間で長年親しまれてきた大切なストーリーをきょうは見ていきたいと思います。

●今回の箇所に関する背景：

ただその前に、一つだけ触れておかないといけないことがあります。先ほどこの箇所を読んだ時に気づいたでしょうか。この箇所の全体７：５３－８：１１は、大きな括弧［］で囲まれていました。ちょっと欄外に目をやると、５３節のところにこんな説明までなされています。「古い写本のほとんど全部が七・五三－八・一一を欠いている」と。いったいこれは何を意味しているのでしょう。結論から言うと、聖書を翻訳したり、聖書を研究したりする学者の間では、今回の箇所は、「もともとの聖書、一番初めに使徒たちによって書かれた原典の中に含まれていなかった」と考えられているということです。これを聞くと驚くかもしれません。ただ少し一緒に考えてみてください。

多くの人はもうすでに知っているかもしれませんが、私たちも持っているこの聖書は、さかのぼれば数多くの写本を元にして作られました。一番初めの原典、聖霊に動かされた使徒たちの書いたオリジナルは、もうこの世には存在していません。けれども同時に、そのオリジナルを写したものは山のようにあって、ギリシャ語の新約聖書だけでも実に５千以上もの写しが残されています。考えてみてください。例えばもし、残されているコピーが二つしかなかったとしたら、読んで、見比べて違いが見つかれば、どちらがオリジナルのものなのかわからなくなってしまうでしょう。でも聖書には、その心配が全くありません。最も古いもので２世紀から存在している写本を含めて、これまで教会は、その残されて

きた大量のコピーを忠実に次の世代が受け継ぎ、そしてそれを忠実に照らし合わせながら、オリジナルのみことばを守り続けてきました。言えば、みことばを与えた神様が、そのみことばを固く守り続けてこられたのです。だからこそ今の私たちは喜ぶことができます。日曜日でも、日々の生活でも聖書を開くその時、私たちはわかるのです。これがただの本ではなくて、まちがいなくオリジナルと変わることのない神様が与えたことばなのだと、確信を持っていることができます。

そして、そんな聖書の中に括弧つきで含まれているのが、今回のストーリー。多くの聖書学者たちは、このストーリーが残念ながら信頼できる古い初期の写本からは欠けていると言うのです。実際、最も信頼性が高いとされる初期の写本、パピルス６６号や７５号にもこの箇所は含まれていません。また現存している最古の聖書全体の写本『シナイ写本』と呼ばれるものにも、この箇所は実は含まれていません。これらの写本では、いずれも７：５２の内容まで来るとそこから飛んで８：１２の内容へと進んでいるのです。

こう聞くと、一つの疑問が頭に思い浮かんできませんか。「最初からなかったのだとしたら、いったいどこからこの物語はやって来たのだろうか」と。この点に関して、先週私はいろいろ調べてみました。そして言えるのは、「このストーリーは最初、福音書に記されたものではなかったにしろ、確かにイエス様が行われた事実であって、そしてそれが後の人によって加えられた」ということです。ここに書かれているのは偽りの空想話ではありません。偽りが勝手に紛れ込んだのではありません。この話は、当初から信仰者たちの間で親しまれ、その重要さのゆえに後になって付け加えられたものでした。実際その様子を、かつての人たちのことばからも読み取ることができます。

たとえば、ヨハネが生きていたのとほぼ同じ時代、紀元６０年から１３０年頃に働いていたパピアスという人物は、主の御前で告発されたひとりの女性の物語を語っていました。また少し後の紀元４００年頃、聖書をラテン語に翻訳したヒエロニムスという人物も、「自身の手元には数え切れないほどの写本があった」と口にしただけでなく、著書の中でこんなことばを残していました。「ヨハネによる福音書において、ギリシャ語写本およびラテン語写本の多くに、主の御前で告発された姦淫の女の物語が見出される。」と。そうすると、少なくとも結論付けられるのは、これから見ていこうとしているこの有名な物語は、おそらくヨハネ自身が直接書いたものではなかったでしょう。おそらくこの有名な話は、もともとの聖書に含まれていたものでもなかったでしょう。つまり、神様自身が記されたオリジナルのことばではなかったでしょう。しかし同時に、この物語は現実の問題としてイエス様の身に起こり、そして長い間聖書の一部として保たれ続けてきたということです。だからこそ、そのような物語を私たちどう扱うのか。私たちはその物語を、イエス様のすばらしさをますます知るための、ある種聖書の付録として、きょうは一緒に考えてみたいと思います。括弧が付いているその話として、ここに歴史的事実としてはっきりと描かれている、恵みとあわれみに満ちた最高の救い主の姿に心を留めてみたいと思います。この箇所について、ひとりの聖書学者レオン・モリスも次のようなことばを残しています。「たとえ、これをヨハネの福音書の一部と感じられないとしても、この物語がイエスの御性質に忠実であることは疑いようがありません。教会の歴史を通して、誰がこれを書いたにせよ、この短い物語は本物であると受け止められてきました。真実味を帯び、私たち自身の姿を映し出しています。……ゆえに、ヨハネの記述ではなくとも、これを学ぶ価値は大いにあるのです。」と。このことばのとおりだと思います。まちがいなく言えるのは、この物語は、イエス様に対する私たちの愛を増し加えてくれます。この方が私たち罪人にとって、いかに大切な、いかにあわれみ深い存在なのかを、ますます感謝することができます。長い前置きはここまでにして、実際の内容を見てみましょう。今回はこの物語を大きく四つの場面に分けて考えてみたいと思います。

〇あふれる罪にまさる主のあわれみ：四つの場面

１．衝撃的なスキャンダル　７：５３－８：４節

まず一つ目に見て取れる場面は、「衝撃的なスキャンダル」です。このように７：５３から記されていました。「**7:53 そして人々はそれぞれ家に帰った。8:1 イエスはオリーブ山に行かれた。:2 そして、朝早く、イエスはもう一度宮に入られた。民衆はみな、みもとに寄って来た。イエスはすわって、彼らに教え始められた。**」と。ちょっと立ち止まって、物語の情景をそれぞれ思い浮かべてみてください。括弧に囲まれた今回の物語が具体的にどの時点で起こったのかについては詳しいことはわかりません。ただ言えることは、イエス様はここでいつものように宮に行かれ、そして朝早くから人々を教えておられた、ということです。

▶**「みもとに寄ってきた」**

２節に出てきていた**「みもとに寄って来た」**という動詞には、人が次から次へとやって来る、そんな意味合いが含まれています。想像できませんか。ある日の朝、いつものようにイエス様は宮に行かれ、そしてイエス様のもとには、数人がポツポツいたのではありません、たくさんの人たちが押しかけていました。イエス様の教えを聞きたい、イエス様から何かを学びたいと集まり続けてくる群衆たちで宮は朝からあふれていたのです。これまでだれも耳にしたことのないような教え、当時の教師、律法学者のようではなくて、権威ある者のように教えるイエス様の大胆なことば。まさにそれらは、当時の人たちにとって関心、注目の的になっていました。いつもと変わらない、そんな日に思えました。

▶**「連れて来て」（cf. ルカ２３：３２；使徒９：２；２３：１０）**

でも、その場面が一変するのです。突如として衝撃的なスキャンダルがもたらされました。続きを見てください。３－４節にこう書いています。「**:3 すると、律法学者とパリサイ人が、姦淫の場で捕らえられたひとりの女を連れて来て、真ん中に置いてから、:4 イエスに言った。「先生。この女は姦淫の現場でつかまえられたのです。」**」と。静かにイエス様の教えに耳を傾けていた穏やかな朝、それは突然終わりを迎えることになりました。集まっていた人たちの目の前に、姦淫の現場で捕まえられたというひとりの女性が連れて来られるのです。ここに書かれていた「**連れて来て**」ということばは、どう考えても優しくエスコートされているような様子ではありません。この「**連れて来て**」ということばが、聖書の中で、何かしら捕まえられた人たちに使われるとき、これは、乱暴に力ずくで引っ張る様子を描いていました。たとえば皆さんもよく知っているステパノ。あのステパノが議会に連れて行かれる場面にもこのことばが使われていました。使徒６：１２にこのように書いています。「**また、民衆と長老たちと律法学者たちを扇動し、彼を襲って捕らえ、議会にひっぱって行った。**」と。この時の女性も.同じだったでしょう。

当時のユダヤ人にとって、「姦淫を犯す」ということは、重罪の一つでした。十戒の７番目でそれが禁じられているだけではありません。ラビのことばにも「すべてのユダヤ人は、偶像礼拝、殺人、姦淫を犯すくらいなら、死を選ぶべきである。」と言われたりもしました。だからこそ、容易に想像できます。三大犯罪のうちの一つを犯した彼女は、まちがいなくその場で捕らえられ、ひどい乱暴を受け、そしてこの場に無理やり強引に引きずられて来たということです。その途中、彼女は自分自身の死を覚悟していたでしょう。集まっている民衆の真ん中に立たされて、多くの人たちの目にさらされた彼女は、大きな恐れや恥を覚えていたでしょう。穏やかだった朝は一瞬にして終わりを迎えました。衝撃的なスキャンダルがイエス様のもとにもたらされました。そして彼女を捕らえた宗教の専門家たちによる訴えが、ここから始まるのです。

２．執拗な訴え　８：４－７ａ節

二つ目に見て取れる場面は、「執拗な訴え」です。もう一度４節から見ると、こう続いていました。「**:4 イエスに言った。「先生。この女は姦淫の現場でつかまえられたのです。:5 モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われますか。」**」と。罪を犯した女性をこの場に連れてきたのは、「**律法学者**」と「**パリサイ人**」でした。ちなみに彼らがそれぞれどんな存在だったか覚えていますか。

▶「律法学者」

「**律法学者**」というのは、文字どおり律法の専門家でした。彼らは旧約聖書、律法に精通していたため、当時、法律家また律法の教師としてだけではなく、裁判官としての役割を果たしていました。律法を知っていたから、それに基づいていろんな判断を下す立場にいたのです。

▶「パリサイ人」

もう一方の「**パリサイ人**」というのは、「分離されたもの」、「一線を画したもの」という意味を持つ「パリサイ」ということばから来たものでした。「**パリサイ人**」というのは、分離された者だったのです。「分離された」とは、どういうことでしょう。当時多くの民が律法に対する熱心さを失って、そこから離れていく中にあって、自分たちこそは真剣にこれを守り続ける、というように熱心だった、一線を画した者たちだったというわけです。彼らは律法のことに関して非常に熱心な者たちでした。

つまり、ここに律法を犯して罪を犯した彼女を連れてきた人々というのは、当時、だれもが知るような律法のエリートたちでした。聖書の知識に関して、彼らの右に出るような者はいなかったのです。そんな彼らがイエス様の前で声を大にして訴えていました。「先生、この女を姦淫の現場で捕まえました。モーセは律法の中でこういう女を石打ちにするように命じていますが、あなたは何と言いますか」と。彼らの訴えはさすがです。彼らの訴え自体は正当なものでした。実際にモーセの律法を見てみれば、次のようにはっきりと書いています。たとえばレビ記２０：１０にこのように書いています。「**:10 人がもし、他人の妻と姦通するなら、すなわちその隣人の妻と姦通するなら、姦通した男も女も必ず殺されなければならない。**」と。レビ記だけではありません。申命記の中にもこんなことばがあります。申命記２２：２２－２４には「**:22 夫のある女と寝ている男が見つかった場合は、その女と寝ていた男もその女も、ふたりとも死ななければならない。あなたはイスラエルのうちから悪を除き去りなさい。:23 ある人と婚約中の処女の女がおり、他の男が町で彼女を見かけて、これといっしょに寝た場合は、:24 あなたがたは、そのふたりをその町の門のところに連れ出し、石で彼らを打たなければならない。彼らは死ななければならない。**」と。確かに言われていました。姦淫の罪を犯せば、その人には厳しい罰が与えられました。そのことをだれよりもよく知っていた律法の専門家たち。そんな彼らがやって来て、「**先生**」とイエス様に意見を求めていたわけです。でも何のためでしょう。姦淫の罪を犯した女性に情けをかけてあげて、どうにかして罰を受けない道を探ってあげるためだったのでしょうか。律法に沿ってきちんと正義をなすために必要となる知恵を、イエス様から求めるためだったのでしょうか。いいえ、そうではありません。彼らの持っていた動機が続きに書いていました。６節の最初にこう書いています。「**彼らはイエスをためしてこう言ったのである。それは、イエスを告発する理由を得るためであった。**」と。律法学者たちが尋ねた理由、それは女性のためではありませんでした。正義が正しく取り行われるためでもありませんでした。彼らは自分たちが忌み嫌っていた、憎んでいたイエス様を訴えるために、この場を意図的に設けていたのです。

実際、皆さんが読んだ時、もしくはきょう読んでみて、このように思ったりしませんでしたか。「姦淫が行われたまさにその現場で捕えられたのだったとしたら、相手の男性はどこ行ったのだろう」、「なぜ女性だけ連れてこられたんだろう」と。この点に関してもいろんな説があります。「男性はひとりだけうまく逃げ出したのではないか」とか、「男性が身分の高い人で、律法学者たちが問題を起こしたくなかったのではないか」と考えられています。書かれていない以上、私たちには詳しいことはわかりません。しかし言えることは、律法の専門家である彼らは、自分たちの目的を達成するために、悪意を持ってみことばとこの女性を使おうとしました。そして、みことばでもってイエス様を訴えて、滅ぼそうとしたのです。彼らはこの時「ハハハハ、してやった」と心の中で笑みを浮かべていたでしょう。もし仮に、イエス様がここで「女性がかわいそうだから石打ちにはしないように」と口にしていれば、彼らは「イエス様がモーセの律法を破ることを教えていた」と非難することになったでしょう。また、この

時代ローマの支配下にあったイスラエルでは、だれかを勝手に死刑にするような権限は与えられていませんでした。だからこそ、仮にここでイエス様が「そのとおりです。石打ちにしましょう。処刑しないといけません」と口にしていれば、彼らはすぐにローマ政府のところに行って、「この人物はローマに逆らっている教えをしています」と非難することにつながったでしょう。つまりどちらに転んだとしてもこの場面というのは、彼らにとっては最高のわなに思えました。イエス様を心底憎んでいた彼らは、やっとイエス様を告発するのに十分な理由が手に入ると、心躍らせていたでしょう。だからこそ、８：７の初めを見ると、そのように思っていた彼らの様子がこのように描かれています。「けれども、**彼らが問い続けてやめなかったので**」と。この部分をそのまま直訳すれば、「けれども、彼らがしつこく問い続けるのをやめなかったので」となります。彼らはしつこく聞き続けていました。要するに、最高のわなを思いついた彼らは、イエス様を陥れることばを引き出すまで、やめようとしなかった、ということです。一度や二度の話ではありません。彼らはイエス様を取り囲んで、イエス様に対して何度も何度もしつこく答えを迫りました。「あなたはどう言うのですか。モーセに同意して『この女を石打ちにする』と言うのですか。それとも『解放すべき』と言うのですか。あなたはどう言うのですか。どう言うのですか。」と。この時点において、人の目にはまるでイエス様が追い詰められているような状況に見えました。でも人の心のうちをご存じだった神の御子には、何の問題にもなりませんでした。執拗に訴え続ける律法の専門家に対して、イエス様は一つの答えを与えるのです。

３．静かな応答　８：７ｂ－９節

それが三つ目に見て取れる場面、「静かな応答」です。悪意に燃え上がっている、激しい訴えがなされる中にあって、イエス様は静かに彼らにこう答えていました。７節の初めからこう続いています。

「**:7 けれども、彼らが問い続けてやめなかったので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」:8 そしてイエスは、もう一度身をかがめて、地面に書かれた。**」と。言うまでもありませんが、イエス様の応答は完璧なものでした。あまりのしつこさにイライラすることもなく、声を荒げることもなく「**あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。**」と言われたのです。これは見事なカウンターパンチでした。どういうことかと言えば、ここでイエス様は、律法学者たちと同じように旧約のことばを引き合いに出しました。申命記の中に次のようなことばが記されています。申命記１７章で、神様の前に悪を行った者に対してどう取り扱うべきなのかが触れられています。申命記１７：５、７にこんな決まりがあったのです。５節「**あなたは、この悪事を行った男または女を町の広場に連れ出し、男でも女でも、彼らを石で打ちなさい。彼らは死ななければならない。**」、そして７節「**死刑に処するには、まず証人たちが手を下し、ついで、民がみな、手を下さなければならない。こうしてあなたがたのうちから悪を除き去りなさい。**」と。「死刑に処するには、ほかのだれでもない悪事を実際に見た証人たちが先に手を下すこと」が求められていました。なぜ証人が先にするのでしょう。それは最初に石を投げる人には、大きな責任が伴ったからでした。もし、だれかに自分の嫌いな人がいたとします。その自分の嫌いな人を勝手に処刑したいからと、嘘の証言をでっち上げて好き勝手に処刑するようなことが起これば、それは当然大変な問題になります。だからこそ処刑が行われる際には、きちんとした証言、真実の証言に基づいて、良心の責めを覚えない無実の証人が最初の石を投げる、ということが決まりになっていたのです。

とすると、考えてみてください。今回の物語で、イエス様のところに姦淫の女を連れてきたその律法学者たちは、イエス様をわなにかけることを考えていました。自分たちが最初に石を投げることなどは考えていなかったでしょう。では、もし彼らがこれに則って石を投げたらどうなりますか。同じです。今度は彼ら自身がローマに逆らう者になってしまいます。もしそれを恐れて投げなければ、今度は自分たちが、律法に逆らう者になります。また、彼らは自分たちが姦淫の女性に向かって石を投げることなんてできない、自分たちはそのような無実の証人ではないということを何よりもよくわかっていまし

た。心のうちをご覧になるイエス様は、こうしてご自身が律法を否定することなく、逆に、彼ら自身の罪深い悪意に満ちた偽善的な心に目を向けさせることを通して、彼らに応答しました。そしてその結果、彼らの取った行動が続く９節に書いていました。「**彼らはそれを聞くと、年長者たちから始めて、ひとりひとり出て行き、イエスがひとり残された。女はそのままそこにいた。**」と。皮肉ですよね。イエス様を訴えて、イエス様のことを恥かしめてやろうと意気込んでいた者たちが、むしろ大いに恥ずかしめを受けて帰っていくことになりました。私たちの愛しているイエス様は知恵に富んでおられ、知恵であるその御子を打ち負かせるような者など、だれもいなかったのです。ひとりまたひとりとその場から去っていきました。最後には、罪を犯した女性とイエス様だけが残されました。そしてその時に、イエス様は驚くほどのあわれみを彼女に示されるのです。そ

４，真のあわれみ　８：１０－１１節

最後に私たちが注目したいクライマックス――四つ目の場面は、「真のあわれみ」です。残された１０節と１１節にこう記されていました。「**:10 イエスは身を起こして、その女に言われた。「婦人よ。あの人たちは今どこにいますか。あなたを罪に定める者はなかったのですか。」:11 彼女は言った。「だれもいません。」そこで、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」〕**」と。この女性の立場になって少し考えてみてください。容易に想像できると思います。彼女はこの時点まで、いろんな恐れを抱いていました。文字どおり彼女のいのちは次の瞬間に奪われそうになっていました。隠れたところで行った罪は公になり、だれにもバレないと思っていたその汚れた行いは、今や多くの群衆の目にさらされることになりました。とてつもない罪悪感、恥、自分自身を責めるような思い、またこの先の不安や将来の恐怖というもので心はいっぱいになっていたでしょう。そしてある意味、それは彼女にとって当然の結果でもありました。彼女自身がそれほどの大きな罪を犯したのです。忘れてはいけません。これは昔も今も同じです。罪を犯せば、そこには必ずそれにふさわしい結果が伴うということです。姦淫の罪を犯した女性には、それ相応のさばきが、それ相応の罰が下って然るべきでした。しかしそんな女性に対して、イエス様は自ら進んで驚くべきあわれみを示されるのです。

▶「婦人よ」（女の方よ）

まずここで、イエス様は彼女を、「**婦人よ**」と呼ばれていました。原文そのままで言うなら、ここは「女の方よ」と訳し直せます。イエス様は目の前にいたその女性に対して、「女の方よ」と呼ばれました。この呼び方を聞いて何か思い当たることはありませんか。これはイエス様が自分の母親に対して使われていたのと同じ呼び方、同じことばでした。十字架の上で苦しむその中、最後まで母親のことを愛していたイエス様は、ヨハネ１９：２６でこんなふうに言われていました。「**:26 イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に「女の方。そこに、あなたの息子がいます」と言われた。**」と。イエス様は自分の母親をもちろん愛していました。「**女の方**」というのは、きつい言い方ではありません。敬意を持った、愛情を示すことばだったのです。そして、イエス様はここで、これと同じことばを使っておられました。

読んでいて気づいたと思います。イエス様はひとり残されたその女性を目の前にして、まず初めに彼女に対して「実際にあなたは罪を犯したのですか」と確認することはしませんでした。なぜでしょう。神の御子であるこの方は、すべてのことをすでにご存じだったからです。聖く、正しい、神様であるイエス様は、何も知らなかったからあわれみを示したのではありません。イエス様は、彼女の犯したすべてのことを知っていてなお、彼女に愛を示そうとされました。「わたしはあなたのことをすべて知っていて、あなたは汚れ果てていて、あなたは罪深すぎるし、あなたは私には値しないから、離れていけ」と言うことはせず、いろんな恐れや罪悪感、責め、そういったものでいっぱいになっている彼女に対して、敬意と愛情を含む呼び方で優しく声をかけました。「女の方よ」と。

これを自分のこととしても考えてみてください。私たちもあわれみを実践しようとはします。でも、私たちのあわれみは、この主のあわれみとどれほど違うでしょう。私たちもあわれみを示しやすい人には喜んで示そうとします。でも大きな罪を持っていて、私たちの目にはあわれみに値しないと思えるような人に対して、私たちは声をかけようともしないかもしれません。自分には関係のない人だと、自分のあわれみに値する人ではないと、別の方向を向くかもしれません。イエス様がなされたことは、まさに本来であればあわれみに値しないようなひどい罪を犯した女性に対して、自ら歩み寄ったということです。これが救い主として来られた方の示された真の、本当のあわれみというものでした。

▶**「わたしもあなたを罪に定めない」**

でもこれだけではありません。イエス様は彼女に対してさらにこう言われていました。もう一度１１節をよく見てください。このように書いていました。「……**イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」〕**」と。立ち止まって、言われていることばが意味している大きさをよく考えてください。イエス様はさっき執拗に訴えをする律法学者たちに向かって、「**罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。**」と言われていました。これを聞いた彼らはみな去っていきました。罪ある彼らのうちにはだれひとりとしてその資格を満たす者がいなかったからです。でも最後に残っていたイエス様、この方だけは唯一この資格を持っておられました。ですからイエス様は彼女に対して、こう告げることもできました。「あなたを罪に定める者は、まだここに残っています。あなたを正当にさばく権利を持っているわたしは、まだここに残っています」と。そして、実際にイエス様がその罪を犯した女性に対してふさわしいさばきを与えたとしても、それは完全に正しいことでした。彼女は聖く正しい神様の前に、神様のことばに逆らい、そしてその御前に大きな罪を犯した存在だったからです。でも皆さん、それでもイエス様はそれをなさいませんでした。まことの神様として、その権利は当然持っておられました。それにもかかわらずこの方は、彼女が値した、ふさわしかったさばきではなく、値しないあわれみを示されたのです。「わたしはその権利を持っている。でもわたしもあなたを罪に定めない」と。こうしてイエス様は、恐怖や恥、そういったものを抱えていた彼女が最も必要としていた赦しというものを与えられました。罪人を救うために来られた救い主は、罪にあふれていた彼女を受け入れ、あふれんばかりの恵みを与えられたのです。

そしてこのクライマックス、このストーリーは、私たちに大切なことを思い出させてくれます。それは、今の私たちも同じだということです。私たちもみな、生まれながらに神様の前にただ有罪とだけ認められる存在、罪人でした。神様を認めようとせずに生きていた私たちは、日々心に浮かぶ、抱く、そういった罪悪感や恥、恐れ、不安から、いつまで経っても逃れることができず、また考えることも、話すことも、取る行動も、神様の基準からかけ離れていた私たちは、ただ神様の正しいさばきだけがふさわしい存在でした。

しかし、そんな愚かで弱い私たちのために救い主は来られました。罪のないこの方が十字架にかかり、私たちの身代わりとなって死なれました。本来なら私たちそれぞれが受けるべき罪の罰を、私たちそれぞれが味わうべき恥を、私たちそれぞれが苦しむべき神の御怒りをその身にすべて背負い、そして、ご自分のいのちを自ら進んでささげられました。だからです。こんな罪まみれの私たちも、恥じることの多いこんな私たちも、責められることの多いこんな私たちも、今この救い主にあって、この救い主が成し遂げられたみわざを信じる信仰にあって、罪赦された者として生きていくことができます。主のうちにすでに入れられた者として、主が義としてくださった者として、もう罪に定められることはないと確信を持って歩んでいくことができます。パウロも信仰者に与えられているすばらしい約束をローマ８：１でこのように言っていました。私たちもみんな好きな箇所の一つでしょう。「**こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。**」と。忘れないでください。イエス様は私たちの罪深さを知らなかったのではありません。その罪深さを正しく罰する権利を持って

おられなかったのでもありません。この方はすべてをご存じで、その権利さえ持っておられました。しかし、そんなお方が、罪深い私たちを拒むのではなく、救いの御手を差し伸べてくださいました。私たちに当然値したさばきではなく、いっさい値しないあわれみを示してくださったのです。そうだとすれば、そんなあわれみを示されたのであれば、今の私たちはどう応答すべきでしょう。

このあわれみ深い救い主を自分の救い主として心から信じて、この方を自分の主人、主として生きていくことです。この方が憎まれているその古い罪の生活を捨てて、聖さを愛する新しい生活をしていくことです。そのように歩んでいく日々の中にあって、私たちも今も罪を犯せば、罪悪感や責めや恥が心に浮かんでくることもあります。そんな自分自身の罪深さを見ていれば、変わらない自分自身を見ていれば、こんなにも罪深い自分など受け入れられないのではないかと恐れや不安を抱くようなこともあるでしょう。でもそんな時こそ、救い主から背を向け離れるのではありません。悔い改めて、いつもその方のもとに立ち返り続けることです。思い出し続けてください。この方が約束してくださっていました。「あなたをもう罪には定めない」と。その約束を持っているから、私たちは確信を持っていつでもこの方のもとに帰り続けることができます。あわれみ深い主の前にへりくだって、そしてこの主への愛のゆえに、私たちは主を愛する者として、罪から離れ続けていくことです。

皆さん、私たちの罪深さはあまりにも根深くて、悲しいことに私たちのうちには罪がまだあふれています。しかし、それにはるかにまさる、私たちを救い、私たちを変え続けてくださるその主のあわれみが与えられ続けています。あふれる主のあわれみに感謝する者として、それに心から拠り頼む者として、ともに歩み続けていきましょう。

かつて、あの有名な賛美歌『驚くばかりの恵み』を作詞したジョン・ニュートンも、友達に送った手紙の中でこんなことばを残していました。自分自身も考えさせられ、励まされたことばです。最後に皆さんにこれをシェアして、終わりにしたいと思います。「あなたには学ばなければならない厳しい教訓があります。それは自分自身の心に潜む悪です。ある程度は知っていますが、更に深く知る必要があります。私たちが己を知れば知るほど、イエスとその救いをいっそう尊び、愛するようになるからです。……時々驚かないでしょうか。これほど貧しく乏しい者にさえ、なお希望が与えられ、主が顧みてくださるということを。あなたの内に生じるあらゆる思いに落胆してはなりません。私たちの医師が全能であるなら、私たちの病が絶望的であるはずがありません。主は御元に来る者を一人として退けられません。どうして恐れを抱く必要があるでしょうか。私たちの罪は多い。しかし、主の憐れみはそれ以上に多い。私たちの罪は大きい。しかし、主の義はそれ以上に大きい。私たちは弱い。しかし、主が私たちの力です。」。